

# 博多 153

— 博多遺跡群第88次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1288集

2016

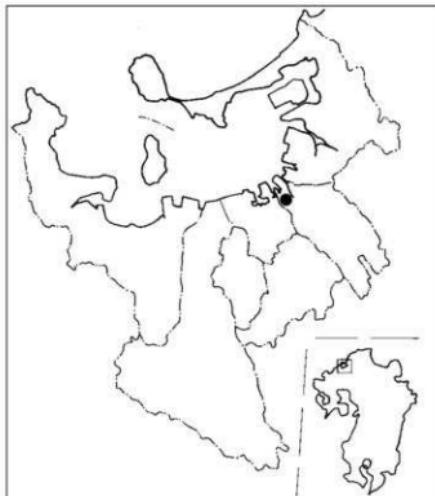
福岡市教育委員会



# 博多 153

— 博多遺跡群第88次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1288集



遺跡略号 HKT-88  
調査番号 9444

2016

福岡市教育委員会



## 序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、個人住宅兼共同住宅建設に伴い、平成6年11月から翌平成7年3月にかけて発掘調査を実施した博多区博多遺跡群第88次調査の成果を報告するものです。

遺跡のある博多は中世において対外交渉の窓口として大きな役割を果たしました。

今回の報告はその中心的役割を担った禅宗寺院聖福寺の門前町を形成する屋敷地の一画とみられる部分の調査で、調査成果は、対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、関係者の方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井龍彦

## 例 言

- 1 本書は福岡市教育委員会が個人住宅兼共同住宅建設に伴い、福岡市博多区御供所町311-313外で発掘調査を実施した博多遺跡群第88次調査の報告である。
- 1 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
9444	HKT-88	355.6m <sup>2</sup>	255m <sup>2</sup>	1994.11.25～1995.3.14

- 1 本書に掲載した遺構の実測は佐藤一郎（調査当時教育委員会埋蔵文化財課）の他、加藤良彦・吉武学・白井克也（同埋蔵文化財課）が行い、製図・写真撮影は佐藤が行った。
- 1 銅製品の保存処理・X線写真撮影は上角智希（埋蔵文化財センター）、その他遺物の実測・製図・写真撮影は佐藤が行った。
- 1 遺物の整理は整理補助員の小畠貴子・古賀美江が行った。
- 1 本書に用いた方位は座標北である。
- 1 遺構は2桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じてSB（建物跡）、SK（土坑）、SX（墳墓）の略号を番号の前につけた。
- 1 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

# 本文目次

Iはじめに .....	5
1 調査に至る経緯 .....	5
2 調査の組織 .....	5
II 遺跡の位置と周辺の歴史環境 .....	6
1 遺跡の位置 .....	7
2 周辺の歴史環境 .....	9
III 調査の記録 .....	9
1 調査の概要 .....	9
2 遺構と遺物 .....	11
検出遺構 .....	11
出土遺物 .....	16
IV 小結 .....	29

# 挿図目次

第1図 博多遺跡群の位置と周辺の遺跡（縮尺 1/25,000） .....	6
第2図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/20,000） .....	7
第3図 博多遺跡群第 88 次調査発掘地（縮尺 1/1,500） .....	9
第4図 博多遺跡群第 88 次調査区壁面土層図（縮尺 1/60） .....	10
第5図 博多遺跡群第 88 次調査遺構配置図（縮尺 1/100） .....	折り込み
第6図 石基礎実測図（1）（縮尺 1/40） .....	12
第7図 石基礎実測図（2）（縮尺 1/40） .....	13
第8図 土坑実測図（縮尺 1/40） .....	14
第9図 墓室実測図（縮尺 1/20） .....	15
第10図 出土遺物実測図（1）（縮尺 1/3） .....	17
第11図 出土遺物実測図（2）（縮尺 1/3） .....	19
第12図 出土遺物実測図（3）（縮尺 1/3） .....	21
第13図 出土遺物実測図（4）（縮尺 1/3） .....	23
第14図 その他の出土遺物実測図（縮尺 1/3） .....	25
第15図 出土甕棺実測図（縮尺 1/6） .....	26
第16図 出土甕棺・土器棺実測図（縮尺 1/4） .....	27

## 図版目次

- 図版 1 1. 1層上面全景（北西から） 2. 2層上面全景（北西から）  
図版 2 1. 3層上面全景（北西から） 2. 4層上面全景（北西から）  
図版 3 1. 4層下面全景（西から） 2. 石基礎（北東から）  
図版 4 1. 石基礎（北東から） 2. 石基礎（北東から）  
図版 5 1. SB47b 石基礎断面b（北東から） 2. SB47b 石基礎断面c（北東から）  
3. SB47b 石基礎断面a（南東から） 4. SB47a 石基礎断面（北から）  
5. SB47b 石基礎断面d（南西から）  
図版 6 1. SK 82 土器溜土坑（南から） 2. SX 24 石組遺構（西から）  
3. Pit56 土師埋納土坑（北西から） 4. SK 25 土坑（北西から）  
図版 7 1. SK 61 土器埋納土坑（西から） 2. SK 74 土器溜土坑（南東から）  
3. SK 51 土器埋納土坑（北西から） 4. SX 89 土壙墓（北東から）  
図版 8 1. SX 102 土器棺墓（北西から） 2. SX 102 土器棺墓（南西から）  
図版 9 1. SX 103 龫棺墓（南西から） 2. SX 96 龫棺墓（南西から）  
図版 10 出土遺物（1）  
図版 11 出土遺物（2）  
図版 12 出土遺物（3）  
図版 13 出土遺物（4）  
図版 14 出土遺物（5）  
図版 15 出土遺物（6）

## 表目次

- 第1表 御供所町周辺発掘調査一覧表 ..... 6  
第2表 博多遺跡群第88次調査出土銅錢一覧表 ..... 25  
第3表 博多遺跡群第88次調査出土土器計測表 ..... 35

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

平成 5(1993) 年 12 月 7 日、個人から本市に対して博多区御供所町 311-313 外における個人住宅兼共同住宅建設に伴う埋蔵文化財事前審査願書(5-2-345)が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の中央のやや南東寄りに位置する。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて平成 6(1994) 年 2 月 8 日に確認調査を実施した結果、現地表下 1.8m の中世後期遺物包含層、2.7m の中世前期遺物包含層、3.1m の黄褐色砂上面で遺構面が確認された。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもつたが、申請面積 355.62 m<sup>2</sup> の内駐車場部分を除いた掘削による影響が及ぶ 255 m<sup>2</sup> を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うことになった。遺構確認面までの表土鏟取りは 10 月 1 日から事前審査担当立会いの下行われた。その後、博多遺跡群 86 次調査(博多区祇園町)担当が 86 次調査終了直後に引継ぎ、発掘調査は平成 6(1994) 年 11 月 25 日から平成 7(1995) 年 3 月 14 日まで行われた。諸般の事情により、発掘調査から 20 年経過した平成 26(2014) 年度に整理、翌 2015(平成 27) 年度に国庫補助事業として報告することとなった。

## 2 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会

発掘調査(平成 6 年度)

資料整理(平成 26・27 年度)

福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課

課長 折尾 学

課長 米倉 秀紀

調査第 2 係長 山崎 純男

資料整理 佐藤 一郎(事前審査係長)

事前審査担当 山口 譲治(主任文化財主事)

埋蔵文化財調査課

菅波 正人(文化財主事) 課長 常松 幹雄

発掘調査 佐藤 一郎(文化財主事) 調査第 1 係長 吉武 学

調査第 2 係長 梶本 義嗣

確認調査は平成 6 年に埋蔵文化財課事前審査担当の山口・菅波が行った。

調査の庶務は文化財部埋蔵文化財課(平成 6 年度)の西田結香、整理の庶務は埋蔵文化財審査課管理係(平成 26・27 年度)の横田忍が行った。

発掘作業 尾花憲吾 楠本純次 柴田博 中村米重 森本良樹 伊藤美伸 尾崎真佐子 河津信子

桑原美津子 為房紋子 津川真千代 播磨博子 福田友子 藤原直子 星子輝美

山口慶子 吉住シズエ 萬スミヨ

整理作業 古賀美江 小畠貴子

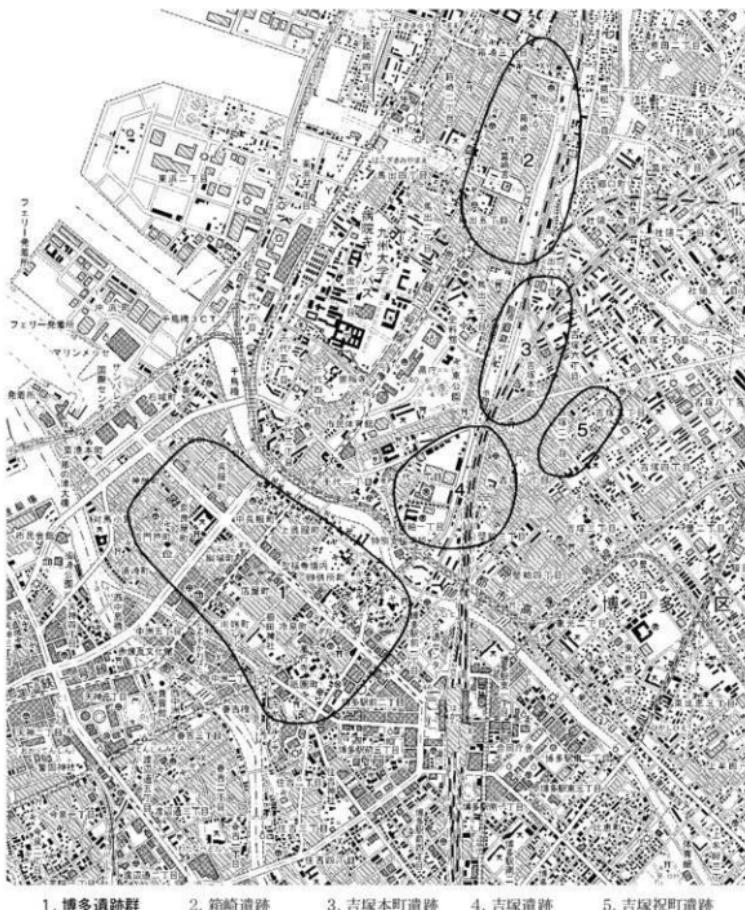
また、施主、施工業者、地元御供所町内、発掘作業員、整理作業員の方々のご協力により、博多遺跡群第 88 次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する次第である。

## II 遺跡の位置と周辺の歴史環境

### 1 遺跡の位置

博多湾岸には砂丘が形成され、湾に注ぐ河川によって分断されている。博多遺跡群は、博多湾岸のほぼ中央に位置し、東を近世に開墾された御笠川（石堂川）、西は那珂川が流れる。

本調査地は博多遺跡群の中では南東部にあたり、現在の聖福寺境内地の南西約100mに位置する。



第1図 博多遺跡群の位置と周辺の遺跡(縮尺 1/25,000)

## 2 周辺の歴史環境

聖福寺は明庵栄西によって創建されたとされるが、その時期については、「元亨釈書」などによる建久6年(1195)説と「聖福禪寺仏殿之記」による元久元年(1204)説がある。

建久6年6月10日の榮西中状は史料的に再検討の余地があるとされるが、宋人が建立した博多百堂の跡に、源頼朝を開基として創建したとある。「博多日記」によると正慶2年(1333)3月13日菊池武時によって博多が焼き払われ聖福寺も被災したとされる。正平10年(1355)に仏殿再建に着手、同22年(1367)に完成するが、これを受けて「聖福禪寺仏殿之記」が翌23年(1368)に記された。その後も戦乱による被災が度重なった。永祿6年(1563)の戦乱で失われた「聖福寺古絵図」は永祿13年(1570)に耳峯玄熊によって修復されたものが伝えられている。中軸線上に三門・仏殿・法堂・方丈が記されている。現在の伽藍配置は三門(1911年完成)・仏殿(1673年完成)・方丈(1845年完成)が一直線に並ぶが、法堂はみられない。伽藍配置を復元するに当たって法堂を加えるのであれば、方丈を背後に引くか三門を前面に出す必要がある。古図では方丈の背後に家並を街路の両側に描くので、方丈の位置は不变で三門は前面の金屋小路に面した総門の位置に比定する説(宮本雅明 1989)に沿って、検討してみる。博多遺跡群35・64次調査では、13世紀末から16世紀後半まで機能した幅6mの道路遺構が検出されている。両側に側溝を配した幹線道路とみられ、聖福寺伽藍中軸線とほぼ直交する。

博多遺跡群62・90次調査地は伽藍の前面に位置し、伽藍中軸線と平行する13世紀後半以降の幅4mの道路遺構が検出されている。聖福寺の方へ延長すると現在の勅使門付近に至る。支線道路の一つ、あるいは参道と考えられる。参道とみた場合、当時の伽藍の中軸線が現在より南東に位置していたこととなる。伽藍の中軸線は中世以来不变の方位をとっているものの、四至の内、両側面については確定し難い。古図には三門の前方に総門が描かれ、幹線道路に面していたとみる場合30m前面に出る。それにともない三門以下の伽藍を構成する建物も前面に出ることと考えられる。

過去の調査成果からみると、博多遺跡群88次調査地は伽藍前面の参道に近い寺内町を形成する屋敷地の一画と推定される。

参考文献 宮本雅明「空間志向の都市史」「日本都市史入門」東京大学出版会 1989、「聖福寺古図」「新修 福岡市史 資料編 中世1 市内所在文書」福岡市史編集委員会 2010



第2図 博多遺跡群発掘区域図(縮尺 1/20,000)

調査次数	調査番号	調査年	所在地	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査期間	報告書	調査原因
博多遺跡群	a	7725	御供所町	1,412.0	1977.12.7 ~ 1978.11.2	105・126	地下鉄
博多遺跡群	1	7810	御供所町	360.0	1978.11.20 ~ 1979.1.18	543	寺院
博多遺跡群	b	7833	御供所町他	4,500.0	1979.3 ~ 1979.12.20	156・193	地下鉄
博多遺跡群	8	8024	御供所町	600.0	1980.8.1 ~ 1980.10.28	543	寺院
博多遺跡群	11	8027	御供所町 3-30				ビル
博多遺跡群	f	8038	御供所町、冷泉町	435.0	1981.10.12 ~ 1981.12.25	105	地下鉄
博多遺跡群	g	8148	御供所町	70.0	1981.9.1 ~ 1981.12.25	193	地下鉄
博多遺跡群	h	8149	御供所町、祇園町	184.0	1981.10.12 ~ 1981.12.6	193	地下鉄
博多遺跡群	28	8508	御供所町 70-2	1800.0	1985.5.20 ~ 1985.8.31	147	ビル
博多遺跡群	n	8527	御供所町	383.0	1985.12.27 ~ 1986.6.30	205	道路
博多遺跡群	30	8605	御供所町 36 他	495.0	1986.5.8 ~ 1986.7.7	149	ビル
博多遺跡群	31	8653	御供所町 65 他	190.0	1986.5.26 ~ 1986.7.10	150	ビル
博多遺跡群	35	8653	御供所町 830	420.0	1986.1.7 ~ 1987.2.10	221	道路
博多遺跡群	48	8915	御供所町 40 他	263.0	1989.5.16 ~ 1989.8.1	282	共同住宅
博多遺跡群	62	8963	御供所町 195 他	2242	1989.12.18 ~ 1991.2.28	397	ビル
博多遺跡群	66	9022	御供所町 129-1 他	444.0	1990.7.9 ~ 1990.9.29	330	ビル
博多遺跡群	71	9111	御供所町 235-1	600.0	1991.5.15 ~ 1991.10.5	450	ビル
博多遺跡群	73	9120	御供所町 15	76.0	1991.8.6 ~ 1991.9.16	1234	事務所
博多遺跡群	88	9444	御供所町 311-313 他	255.0	1994.10.1 ~ 1995.3.14	1288	自宅兼共同住宅
博多遺跡群	94	9551	御供所町 19-2 他	567.0	1996.2.6 ~ 1996.7.4	593	寺院
博多遺跡群	106	9777	御供所町 5-20	48.0	1998.3.13 ~ 1998.3.26	593	共同住宅
博多遺跡群	107	9778	御供所町地内	120.0	1998.3.18 ~ 1998.5.29	706	道路
博多遺跡群	130	0102	御供所町 3-17	42.0	2001.4.9 ~ 2001.4.27	762	個人住宅
博多遺跡群	145	0342	御供所町 313-2	254.0	2003.9.3 ~ 2003.12.5	851	共同住宅
博多遺跡群	177	0730	御供所町 123 番、 155 番 11	6.5	2007.8.20 ~ 2007.8.21	年報 22	個人住宅
博多遺跡群	183	0815	御供所町 2-4	153.4	2008.6.9 ~ 2008.6.23	1088	寺院
博多遺跡群	190	0935	御供所町 6 番	56.0	2010.2.15 ~ 2010.3.4	1126	寺院
博多遺跡群	194	1221	御供所町 1-1	394.0	2012.10.9 ~ 2013.3.8	1266	学校
博多遺跡群	196	1313	御供所町 8 番 1 号	1600.0	2013.7.1 ~ 2013.10.24	1268	校舎解体
博多遺跡群	198	1324	御供所町 23 番、 22 番 9 ~ 16	43.3	2013.9.17 ~ 2013.10.23	1270	立体駐車場
博多遺跡群	199	1333	御供所町 302 番	263	2013.11.15 ~ 2014.3.20	1289	共同住宅

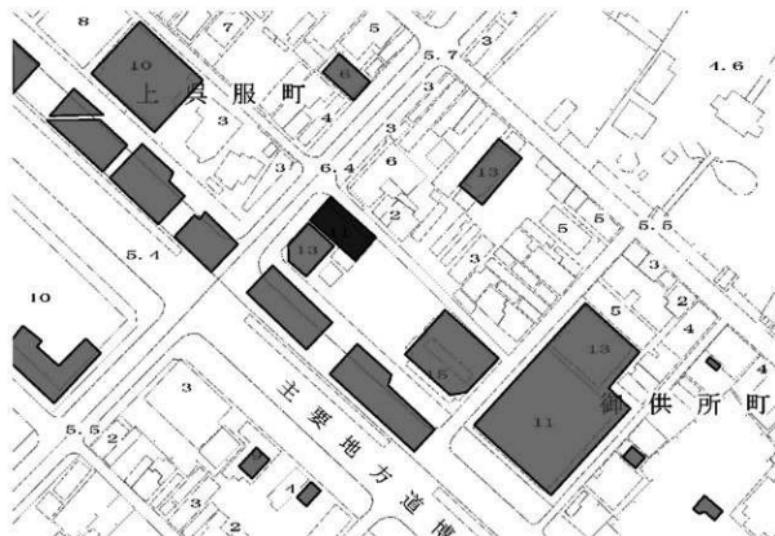
第1表 博多遺跡群 御供所町 発掘調査一覧表

## II 第13次調査の記録

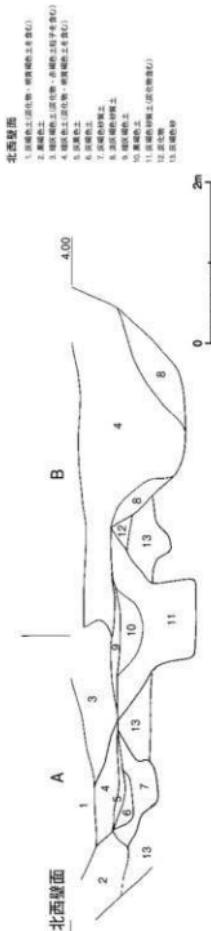
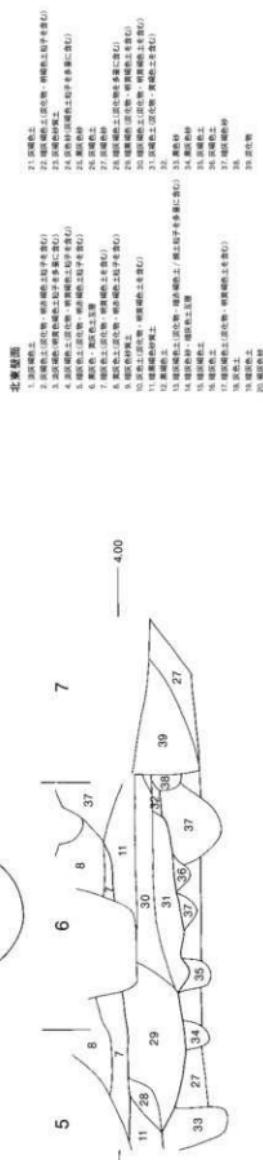
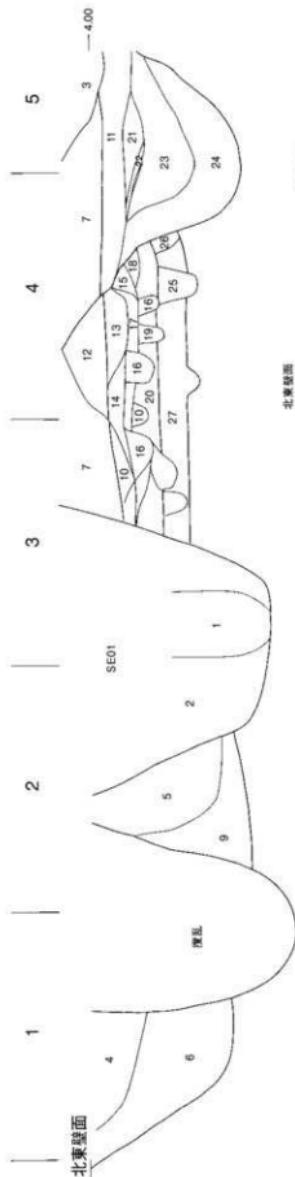
### 1. 調査の概要

調査地は博多遺跡群の陸地側砂丘博多浜中央部東南、聖福寺境内の南側に位置する。地山の砂層の標高は約2.1m、その上に約2.4mの遺物包含層が堆積している。

確認、検出された層位、遺構について述べると、1～2層は淡灰褐色土～黄灰色土を主とし、焼土や炭化物を含んでいる。掘り下げ時に検出した遺構の時期から1層（下面の標高4.5m前後）が15世紀前半とみられ、N-35°-Wに方位を取る矩形の石基礎、井戸1、土坑を検出した。2層（下面の標高4.0m前後）は13世紀後半～14世紀前半とみられ、石基礎、土坑を検出した。3層（下面の標高2.4m前後）は暗灰褐色砂質土を主とし、掘り下げ時に検出した遺構の時期から11世紀後半～12世紀後半とみられる。上面で矩形の石基礎、土坑を検出した。4層は黄褐色砂を主とし、時期は8～9世紀とみられる。上面で柱穴・ピット状遺構、土坑、溝を検出した。下面の黄白色砂層（地山）で弥生時代後期終末の甕棺墓2基、古墳時代初頭の土器棺墓1基を検出した。



第3図 博多遺跡群第88次発掘調査地(縮尺 1/1,500)



第4図 博多諸群第88次調査壁面土層図(縮尺1/60)



第5図 博多遺跡群第88次調査遺構配置図（縮尺1/100）



## 2. 遺構と遺物

以下検出した遺構と出土した遺物について報告する。調査区は北東から南西にかけての長軸方向で二分し、西側をA、東側をB、南西辺から3m毎に1~7と区分けし、数字とアルファベットの組み合わせでグリッドを示す。遺物包含層出土遺物はグリッド毎に取り上げた。

### 検出遺構（第6～9図）

**石基礎 S B 47a** 2層上面（A・B-1）で検出した。方位はN-45°-Eに取る。北西で延長5.2m、北東で延長0.9m、L字状に残存する。拳大の礫を幅40cm、深さ40cmの範囲に積んでいる。溝状の掘り込みは確認されなかった。北隅には直径30～50cm、厚さ15cmの扁平な礫が据えられているが、上面のレベルが拳大礫の上端より10～15cm上有ることから、全体に据えられていた可能性がある。

**石基礎 S B 47b** 2層上面（A・B-4）で検出した。方位はN-45°-Eに取る。延長4.0m検出した。直径30～50cm、厚さ15cmの扁平な礫が据えられて、下部には拳大の礫が据えられている。

### 石基礎 S B 47c

1層上面（B-4）で検出した。方位はN-45°-Eに取る。北西で延長4.0m、北東で延長1.0mm、L字状に残存する。北東が土坑S K 02に切られている。

**礎石建物 S B 47d** 2層上面（A・B-7）で検出した。直径30～40cm、厚さ10cmの扁平な礫3が、1.2mの間隔を取って並ぶ。栗石や土坑等の掘り込みは確認されなかった。方位はN-35°-Eに取る。

**石敷遺構 S X24** 1層上面（B-6）で検出した。1.2m四方、標高4.9～5.0mの範囲に、主に拳大の礫が敷きつめられている。主軸の方位はN-35°-Eに取る。

**ピット状遺構 Pit56** 2層上面（A-6）で検出した。長径4.5m、短径3.5m、深さ0.15mの不整方形のピット状遺構で、土師器小皿2・杯2が底面より15cm浮いた状態で出土した。

**土器埋納土坑 S K 51** 1層上面（B-6・7）で検出した。明確な掘り込みは確認できなかったが、精製の土師器小皿・杯がまとめて出土した。

**土坑 S K 11** 1層掘り下げ時にB-5グリッドで検出した。長径1.3m、短径1.3m、深さ0.35mの方形の土坑で、土師器小皿・杯が大量に出土した。方位はN-54°-Wに取る。

**土坑 S K 25** B-6で1層掘り下げ時に検出した1.2m四方、深さ0.2mの正方形の土坑で、方位はN-35°-Eに取る。

### 土坑 S K 63

2層上面（A-7）で検出した。径0.6m、深さ（検出時）0.2mの不整円形の土坑である。

**土坑 S K 64** 2層上面（B-5）で検出した。長径1.3m、短径1.3m、深さ0.35mの方形の土坑である。方位はN-35°-Eに取る。

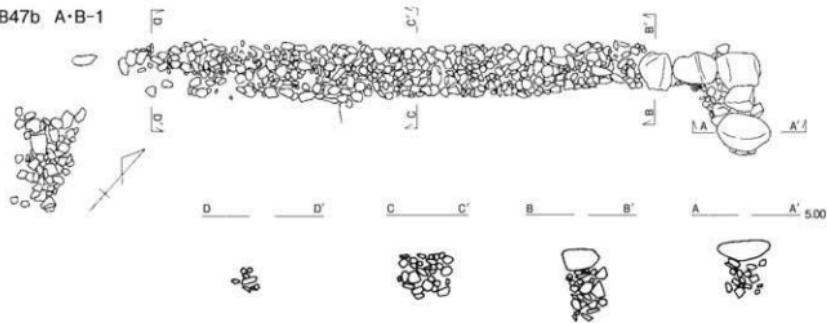
**土坑 S K 66** 2層上面（A-4）で検出した長径0.9m、短径0.7m、深さ0.2mの楕円形の土坑で、土師器鍋が底面より浮いた状態で出土した。

**土坑 S K 74** 2層上面（B-6）で検出した長径1.0m、短径0.8m、深さ0.2mの不整方形の土坑で、土師器小皿・杯が大量に出土した。

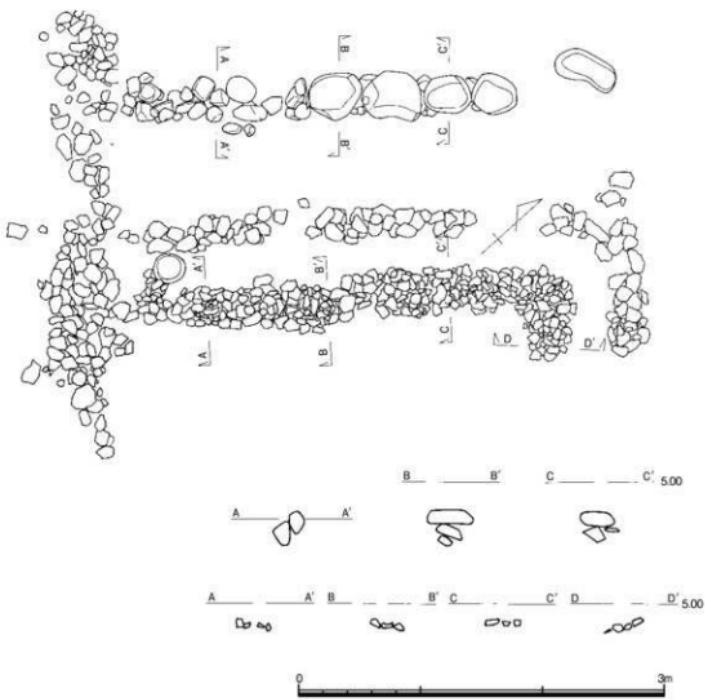
**土坑 S K 83** 2層上面（B-4）で検出した長径1.6m、短径1.0m、深さ0.15mの隅丸方形の土坑で、北東側が石基礎に切られている。方位はN-45°-Eに取る。

**土壙墓 S K 89** 3層上面（A-4）で検出した全長1.7m、幅0.8m、深さ0.3mの隅丸方形の土壙で、墓壙の南端で完形の土師器小皿が底面より15cm浮いた状態で出土した。方位はN-37°-Eに取る。

SB47b A-B-1



SB47a  
A-B-4



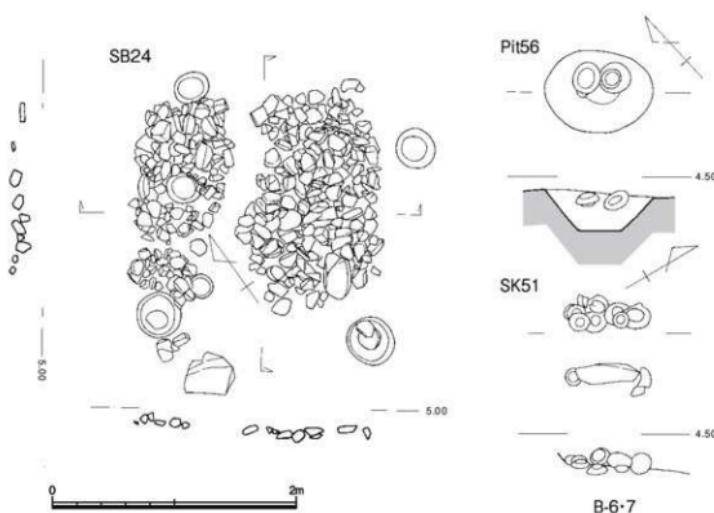
第6図 石基礎実測図(1) (縮尺 1/40)

**甕棺墓 S X 96** 調査区北東で検出された単棺式の甕棺である。口縁部を打ち欠いた甕を用いている。主軸方位は N- 40° - E、棺の埋置角度は 10° を測る。墓壙は検出できなかった。

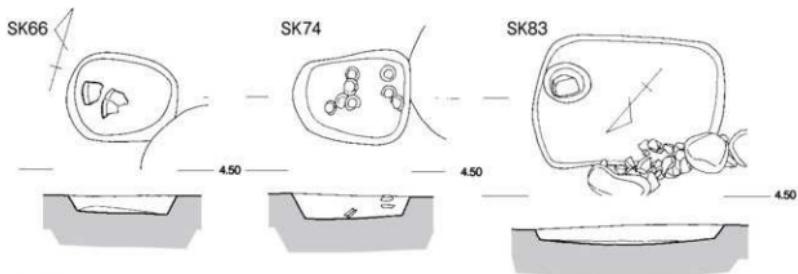
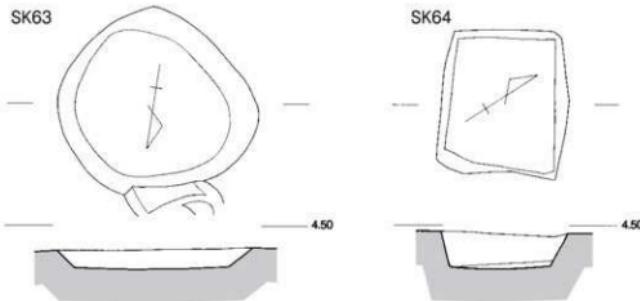
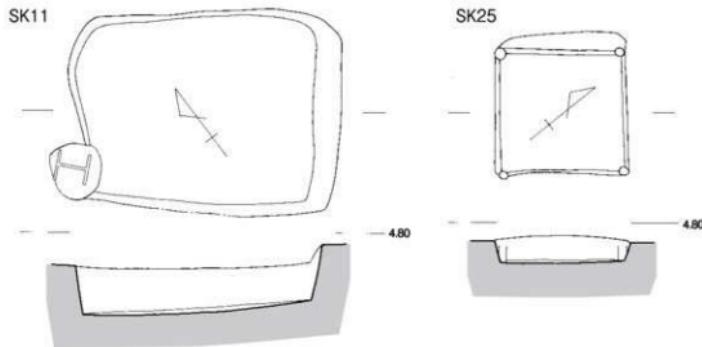
**土器棺墓 S X 102** 調査区北東で検出された接口式の台口甕棺である。鉢と口縁部を打ち欠いた甕の組み合わせで、主軸方位は N- 40° - W、棺の埋置角度は 15° を測る。墓壙は長径 1.5m、短径 0.85m、残存する深さ 0.4m を測り、平面形は梢円形を呈する。

**甕棺墓 S X 103**

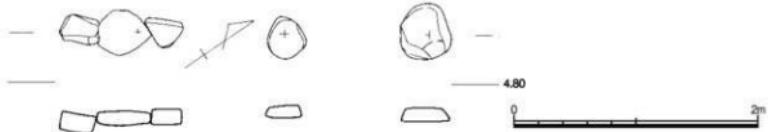
調査区北東で検出された単棺式の甕棺である。口縁部を打ち欠いた甕を用いている。主軸方位は N- 45° - E、棺の埋置角度は 35° を測る。墓壙は径 0.7 m、残存する深さ 0.5 m を測り、平面形は不整円形を呈する。



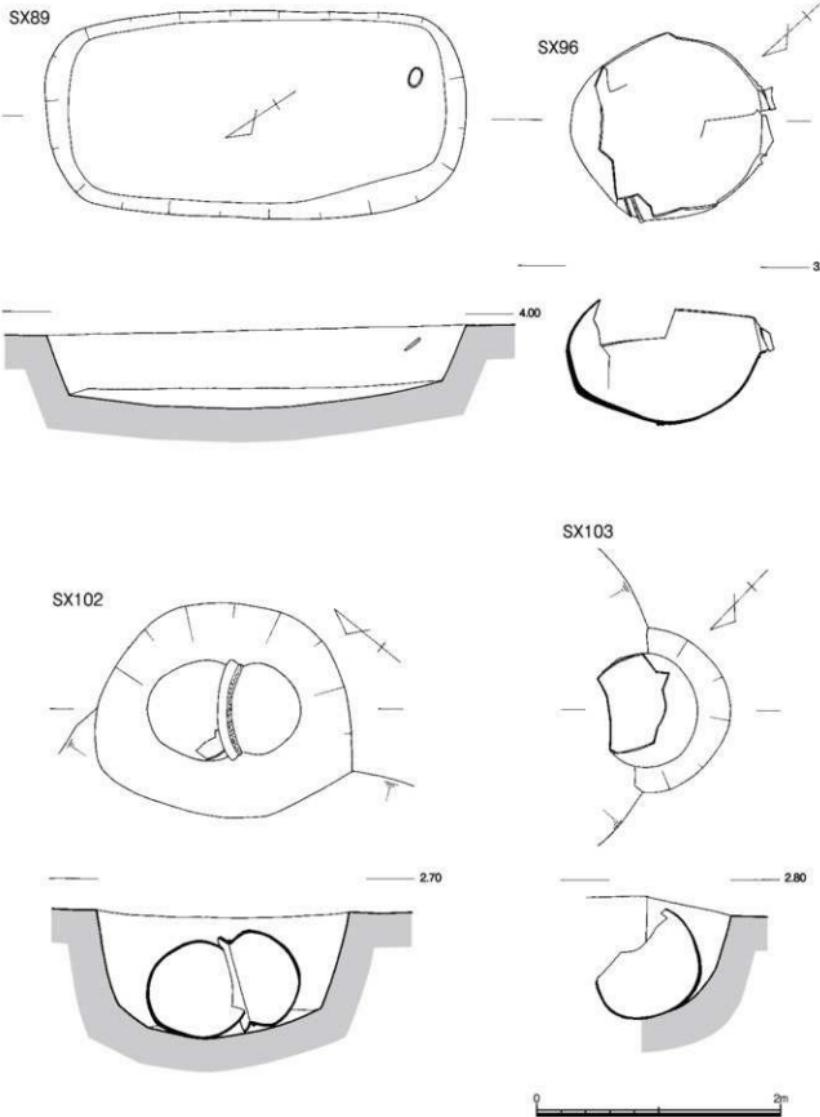
第7図 石基礎実測図(2)(縮尺 1/40)



#### 礎石建物



第8図 土坑実測図(縮尺 1/40)



第9図 墓実測図(縮尺 1/20)

## 出土遺物

### S K03出土遺物（第10図）

土師器 底部は糸切り離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（1・2）口径 8.1cm、器高 1.2・1.4 cm、底径 5.5・5.7cm を測る。

杯（3～9）口径 12.1～12.6cm、器高 2.3～2.9cm、底径 7.2～7.9cm を測る。

### S K06出土遺物（第10図）

青磁 皿（10）体部外面に蓮弁を割り出す稜花皿で、内面は型押しによって施文されている。口縁端部は水平に引き出され、上面に七星文を配している。体部内面に花卉文、内底見込みには双魚文を配している。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉が高台の端部を除いて、全面に掛けられている。

### S K07出土遺物（第10図）

土師器 小皿（11）底部は糸切り離しにより、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 9.2cm、器高 1.7cm、底径 5.1cm を測る。

陶器 皿（12）全面に施釉され、内底に目痕が 4 力所残る。胎土は黒色を呈し、白色微粒子を含む。灰オリーブ色の釉が全面に掛けられている。

粉青沙器 皿（13）内底見込み圓線をめぐらせ、中心部に花文、外周部に繩籠文を印花象嵌する。胎土は緑灰色を呈し、オリーブ灰色透明の釉が全面に掛けられている。

### S K08出土遺物（第10図）

土師器 底部は糸切り離し、15 の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。他は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。小皿（14～16）口径 7.8～8.0cm、器高 1.4～1.5cm、底径 4.7～6.4cm。杯（17）口径 11.4cm、器高 2.4cm、底径 7.2cm を測る。

青白磁 水注 盖（18）傘型の天井部に筒状の身受けの返りを付ける。天井部の外面は型造りによって八弁花を模る。縁に紐掛けの環を付ける。

### S K09出土遺物（第10図）

青花 碗（18）饅頭心碗底部片で、内底見込みに团花文を描き、外底に「宣徳年製」の年款を記す。高台径 4.2cm を測る。皿（19）端反り皿の底部片で、内底見込みに雲堂手の風景を構成する欄干や植物を描く。高台径 7.1 cm を測る。

### S K11出土遺物（第10図）

土師器 小皿（20・21）底部は糸切り離し、20 の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口縁端部に煤が付着している。口径 6.3cm、器高 1.4cm、底径 4.2cm を測る。21 は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径 7.5cm、器高 1.9cm、底径 4.2cm を測る。

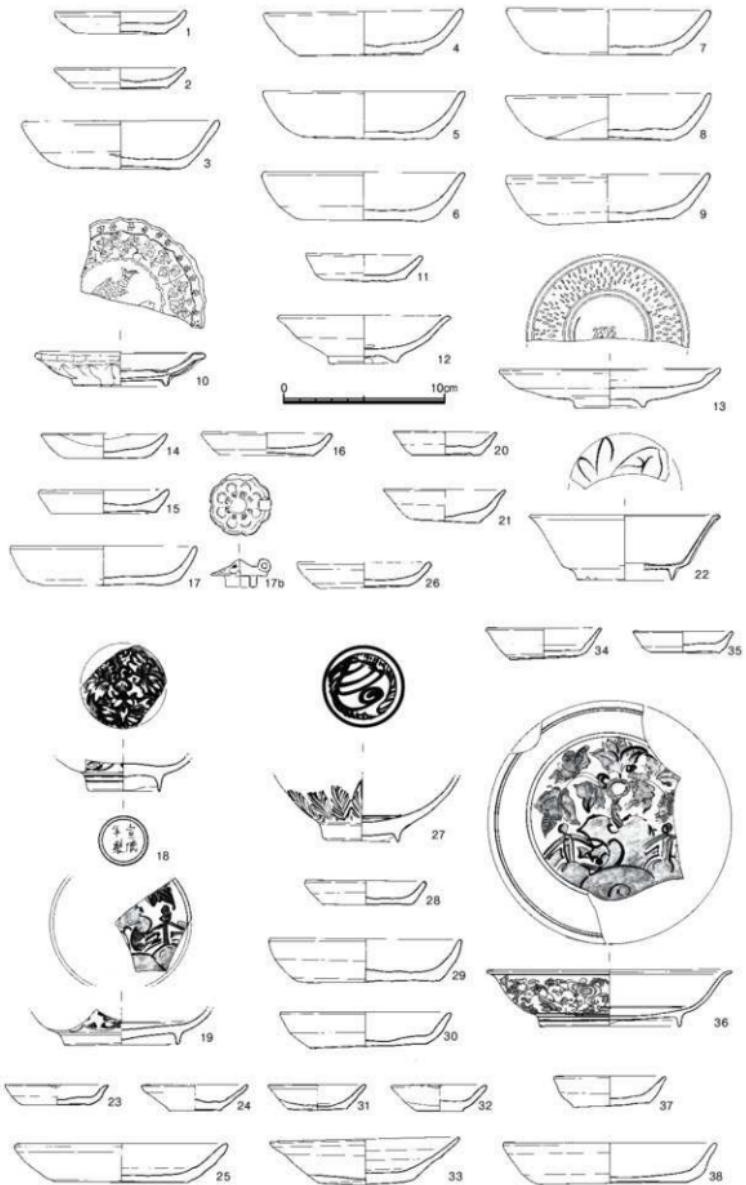
青磁 杯（22）無文の杯Ⅲ-1a で、底部と体部の境で屈曲し、明瞭に稜をなす。体部は直線的に外に開き、口縁端部は外側に摘み出され、上面を平坦にする。底部の内側に削り出し高台を付ける。内底見込みは平坦で、画花文が配されている。胎土は灰白色を呈し、オリーブ黄色の釉が掛けられている。

### S K12出土遺物（第10図）

土師器 小皿（23・24）底部は糸切り離し、23 の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 6.4cm、器高 1.2cm、底径 4.0cm を測る。24 は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径 6.3cm、器高 1.6cm、底径 3.2cm を測る。

### S K15出土遺物（第10図）

土師器 杯（25）底部は糸切り離し、内底まで横ナデされ、一部ナデがみられる。外底には板状圧痕はみられない。口径 13.1cm、器高 2.3cm、底径 8.3cm を測る。



第10図 出土遺物実測図(1)(縮尺 1/3)

#### S K 17出土遺物（第10図）

土師器 小皿(26) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径8.2cm、器高1.5cm、底径5.5cmを測る。

青花 碗(27) 蓼子碗の体部下半で、体部外面に蕉葉文、内底見込みに法螺貝を描く。底径4.6cmを測る。

#### S K 18出土遺物（第10図）

土師器 小皿(28) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径7.5cm、器高1.5cm、底径5.5cmを測る。

#### S K 19出土遺物（第10図）

土師器 杯(29) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径11.8cm、器高2.5cm、底径9.0cmを測る。

#### S K 20出土遺物（第10図）

土師器 杯(30) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径14.5cm、器高2.5cm、底径7.2cmを測る。

#### S K 22出土遺物（第10図）

土師器 胎土は精良で、鋭く薄手に仕上げられている。底部は糸切り離しされ、体部外面下半まで切り離しの痕跡が残る。内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。小皿(31・32) 口径5.8・6.0cm、器高1.6cm、底径3.6・2.9cm、杯(33) 口径11.6cm、器高2.8cm、底径5.7cmを測る。

#### S K 25出土遺物（第10図）

土師器 小皿(34・35) 底部は糸切り離し、34は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径7.1cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測る。35の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径6.1cm、器高1.4cm、底径4.3cmを測る。

青花 皿(36) 端反り皿で、内底見込みに雲堂手の風景を構成する欄干や植物を描く。口径15.0cm、器高3.5cm、高台径8.6cmを測る。

#### S K 26出土遺物（第10図）

土師器 小皿(37) 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径6.9cm、器高1.8cm、底径4.7cmを測る。

土師器 杯(38) 内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径13.1cm、器高2.6cm、底径9.3cmを測る。

#### S K 27出土遺物（第11図）

土師器 小皿(39) 内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径5.9cm、器高1.2cm、底径4.3cmを測る。

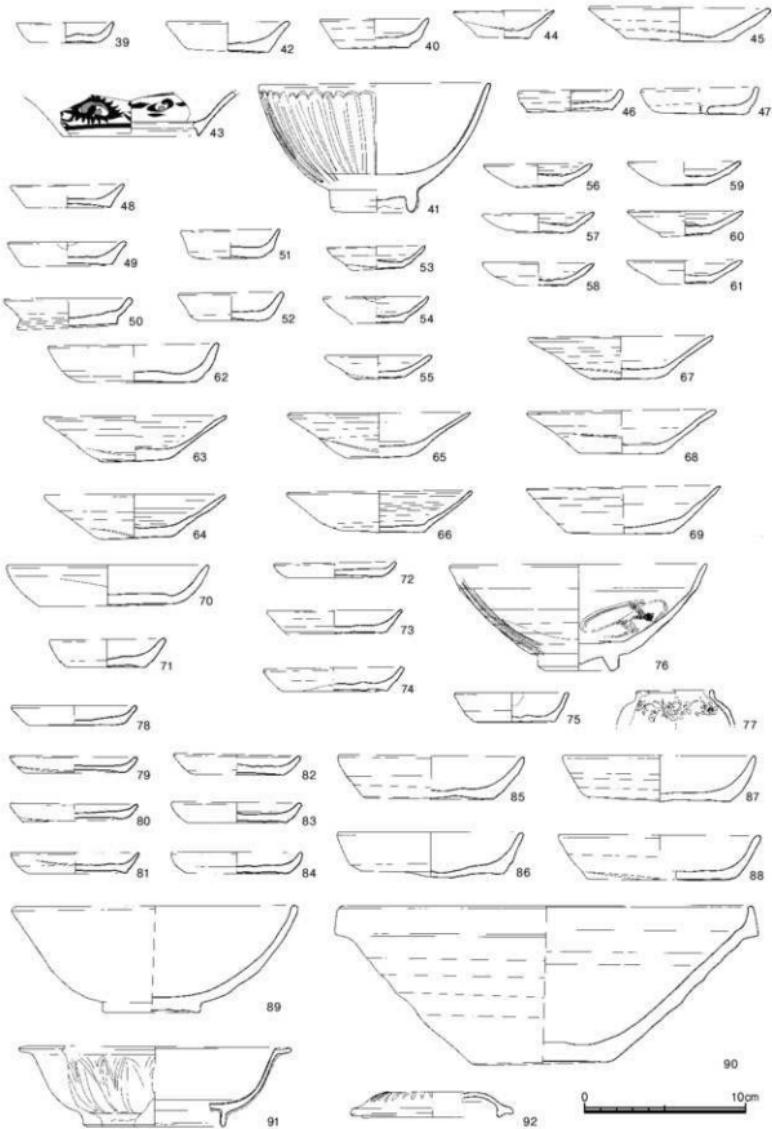
#### S K 28出土遺物（第11図）

土師器 小皿(40) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径6.9cm、器高1.8cm、底径4.2cmを測る。

青磁 碗(41) 体部外面に細蓮弁を線彫りする。胎土は灰色を呈し、灰オリーブ色の釉が高台内側まで掛けられている。復元口径14.2cm、器高7.9cm、底径5.4cmを測る。

#### S K 29出土遺物（第11図）

土師器 小皿(42) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径7.5cm、器高1.9cm、底径5.0cmを測る。



第11図 出土遺物実測図(2)(縮尺 1/3)

S K 38出土遺物（第11図）

五彩皿(43) 軸上に赤褐色と黄緑色の顔料を用いて牡丹唐草文を描く。底径8.4cmを測る。

S K 41出土遺物（第11図）

土師器 胎土は精良で、鋭く薄手に仕上げられている。底部は糸切り離しされ、体部外面下半まで切り離しの痕跡が残る。内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。小皿(44) 口径6.2cm、器高1.7cm、底径3.2cm、杯(45) 口径11.1cm、器高2.1cm、底径6.3cmを測る。

S K 45出土遺物（第11図）

土師器 小皿(46) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径6.4cm、器高1.3cm、底径5.3cmを測る。

S K 48出土遺物（第11図）

土師器 小皿(47) 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。底部中央に径0.3cmの孔が穿たれている。口径7.2cm、器高16cm、底径5.2cmを測る。

S K 51出土遺物（第11図）

土師器 小皿(48～50) 48・49の底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径7.0・7.3cm、器高1.4・1.5cm、底径5.2・5.4cmを測る。49の口縁端部には煤が付着している。50の底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。円盤高台状の底部をもつ。口径7.9cm、器高1.7cm、底径6.1cmを測る。

土師器 特小皿(51・52) 51・52の底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。体部外面下位に稜が付く。口径6.1・6.5cm、器高1.8・1.7cm、底径4.1・4.2cmを測る。

土師器 精製小皿(53～61) 胎土は精良で、鋭く薄手に仕上げられている。底部は糸切り離しされ、体部外面下半まで切り離しの痕跡が残る。内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径6.1～7.1cm、器高1.2～1.6cm、底径2.8～3.4cmを測る。

土師器 杯(62) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。体部外面下位に稜が付く。口径10.5cm、器高2.4cm、底径7.4cmを測る。

土師器 精製杯(63～69) 精製小皿と同様に精良な胎土で、鋭く薄手に仕上げられている一群である。底部は糸切り離しされ、体部外面下半まで切り離し痕が残る。内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径11.1～11.9cm、器高2.5～2.9cm、底径4.0～6.4cmを測る。

S K 55出土遺物（第11図）

土師器 杯(70) 底部は糸切り離し、体部外面下半まで切り離し痕が残る。内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径12.4cm、器高2.5cm、底径8.1cmを測る。

S K 57出土遺物（第11図）

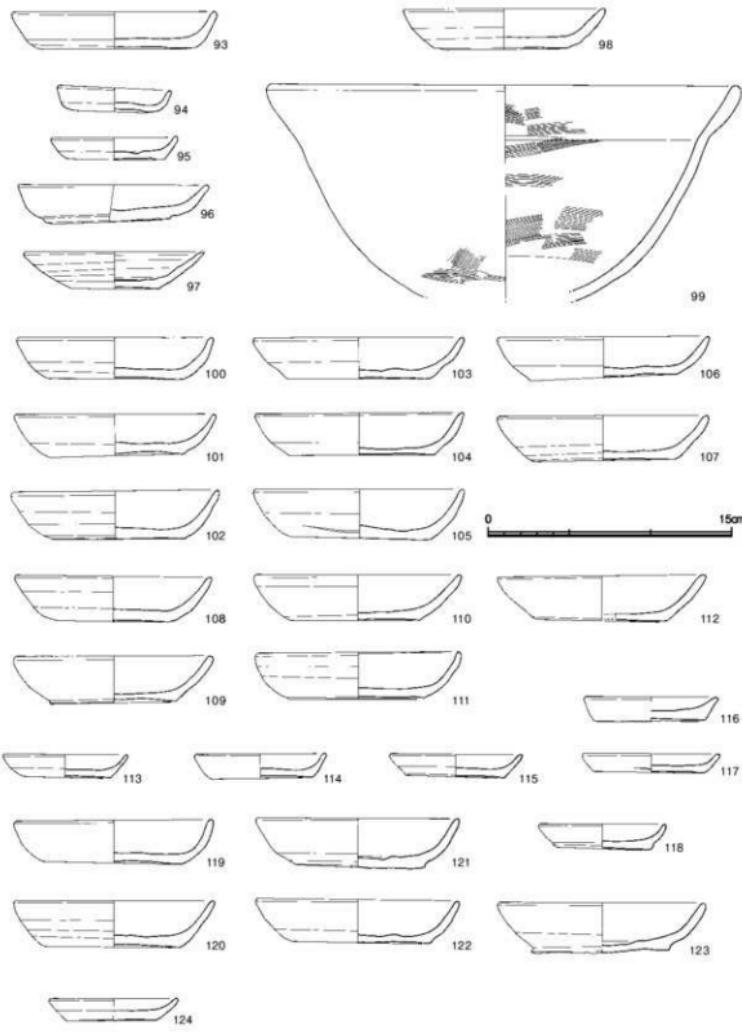
土師器 特小皿(71) 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。体部外面下位に稜が付く。口径7.1cm、器高1.8cm、底径4.8cmを測る。

S K 60出土遺物（第11図）

土師器 小皿(72～74) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。74は体部外面下半まで糸切り痕が残る。口径7.5～8.5cm、器高0.9～1.5cm、底径5.6～6.3cmを測る。

土師器 特小皿(75) 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。体部外面下位に稜が付く。口径7.0cm、器高1.8cm、底径5.0cmを測る。

青磁碗(76) 体部外面に櫛目、内面にヘラ書き文と之字形点綴文を入れる同安窯系の碗で、灰白色の胎土に、オリーブ黄色の釉が体部外面下半まで掛けられている。口径15.8cm、器高6.5cm、高台径5.5cmを測る。



第12図 出土遺物実測図(3)(縮尺 1/3)

**青白磁 小壺(77)** 残存する体部上位の外面に型押しで、菊花文を配している。復元口径 4.7cm を測る。胎土は白色を呈し、無色透明～明褐灰色の釉が掛けられている。

S K61出土遺物（第11図）

**土師器** 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿(78～84) 口径 7.7～8.1cm、器高 0.9～1.3cm、底径 5.4～6.3cm を測る。

杯(85～88) 口径 11.3～12.4cm、器高 2.7～2.9cm、底径 8.0～8.9cm を測る。

**瓦器 瓢(89)** 体部は丸みを持ち、口縁部は直線的に外に開く。口縁端部は平坦で、外傾する。高台はやや上げ底の円盤状をなす。体部外面から高台まで、横ナデ調整される。口径 16.5cm、器高 6.5cm、高台径 6.0cm を測る。口縁端部から外面全体にかけて灰色、その他の部位は灰白色を呈する。

**須恵器 こね鉢(90)** 束播系で、体部は口縁部まで直線的に外に開く。口縁部は断面の字を呈する。体部外面から内面上半は横ナデ、体部内面下半以下は磨滅が著しい。底部は糸切り離しによる。復元口径 26.0cm、器高 9.6cm、底径 8.5cm を測る。赤灰色を呈する。

**青磁 杯(91)** 龍泉窯系の鐸状口縁蓮弁文杯Ⅲ-4で、灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉が高台の端部を除いて、全面に掛けられている。口径 16.7cm、器高 5.0cm、高台径 8.6cm を測る。

**青白磁 小壺 蓋(92)** 胎土は灰白色を呈し、無色透明の釉が全面に掛けられた後、返りの部分が挿き取られている。天井部外面に放射状の文様をヘラ彫りする。復元口径 10.0cm を測る。

S K63出土遺物（第12図）

**土師器 杯(93)** 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径 12.5cm、器高 2.2cm、底径 9.3cm を測る。

S K64出土遺物（第12図）

**土師器 小皿(94・95)** 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。体部外面下位に稜が付く。口径 7.0～7.8cm、器高 1.5～1.3cm、底径 4.9～5.7cm を測る。

**土師器 杯(96)** 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 11.7cm、器高 2.2cm、底径 7.2cm を測る。

**土師器 精製杯(97)** 精良な胎土で、鋭く薄手に仕上げられている。底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 11.1cm、器高 2.3cm、底径 5.4cm を測る。

S K66出土遺物（第12図）

**土師器 杯(98)** 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。口径 12.4cm、器高 2.5cm、底径 7.6cm を測る。

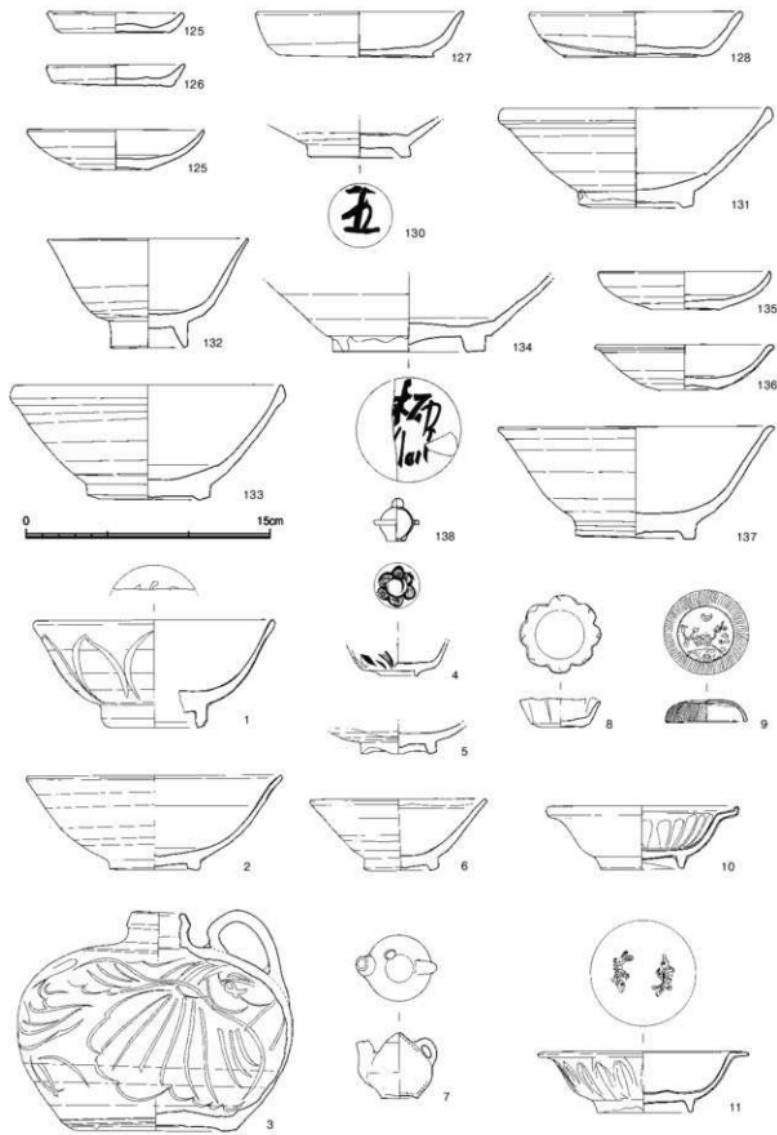
**土師器 鍋(99)** 口縁部と体部の境は内面に鋭い稜がつくが、外面では不明瞭である。復元口径 29.2cm を測る。胎土は黄橙色を呈し、口縁部内面以外の部位は煤が付着している。

S K74出土遺物（第12図）

**土師器 杯(100～107)** 底部は糸切り離し、内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。100・101・104・106 の内底中心部には木口による回転横ナデの痕跡がみられる。105 は体部外面下半まで切り離し痕が残る。口径 12.0～13.0cm、器高 2.4～3.0cm、底径 8.1～8.9 cm を測る。

S K75出土遺物（第12図）

**土師器 杯(108～112)** 底部は糸切り離し、108～110 は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕はみられない。111・112 の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径 12.1～12.8cm、器高 2.7～2.9cm、底径 6.4～8.4cm を測る。



第13図 出土遺物実測図(4)(縮尺 1/3)

#### S K82出土遺物（第12図）

土師器 杯（113～117）底部は糸切り離し、113～115は内底まで横ナデ、外底には板状圧痕がみられない。116・117の体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.6～8.4cm、器高1.0～1.5cm、底径5.0～6.9cmを測る。

#### S K83出土遺物（第12図）

土師器 小皿（118）底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.8cm、器高1.5cm、底径6.2cmを測る。

#### S K88出土遺物（第12図）

土師器 小皿（119～123）底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。12.3～12.7cm、器高2.6～3.0cm、底径7.9～8.6cmを測る。

#### S K89出土遺物（第12図）

土師器 小皿（124）底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。口径7.9cm、器高1.4cm、底径5.5cmを測る。

#### Pit56出土遺物（第13図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は横ナデ、内底はナデ、外底には板状圧痕がみられる。

小皿（125・126）口径8.4・8.5cm、器高1.3cm、底径6.8・7.3cmを測る。

杯（127・128）128は体部外面下半まで切り離しの痕跡が残る。口径12.8・13.2cm、器高2.8cm、底径9.4・9.3cmを測る。

#### Pit102・103出土遺物（第13図）隣接する構造から出土した破片が接合したものである。

白磁 皿（129）口縁部が内湾する平底の皿で、口径10.8cm、器高2.5cm、底径4.2cmを測る。

#### Pit137出土遺物（第13図）

白磁 碗（130・131）130は外面を直、内面を斜めに削り出した低めの高台がつく底部片で、内定見込みは平坦にされ、高台と径を同じくする。外底には墨書が記されている。131は口縁部を玉縁状にし、内底見込みには沈線状の段がつくIV類の碗である。

#### Pit138出土遺物（第13図）

白磁 碗（132～134）132は口径に比して器高、高台が高く、口縁端部を先細りに外反させる。133はIV類の碗である。134は内底の釉を輪状にかき取り、高台はやや低めの大型の碗である。外底には墨書が記されている。

白磁 皿（135・136）135は口縁部が内湾する平底皿、136は口縁部が外反し、端部を斜めに切ったやや上げ底の平底皿である。

青磁 碗（137）粗製の高麗青磁で、断面台形の高台を削り出し、体部下位で屈曲し直線的に延び、口縁部下で外反する。粗砂粒を含む青灰色の胎土に灰オリーブ色の釉が掛けられている。口径17.0cm、器高6.9cm、高台径7.4cmを測る。

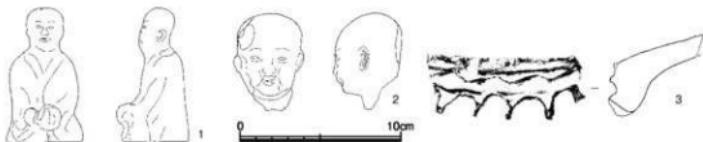
ガラス製容器 蓋（138）吹きガラス成形による直径2.8cmの球体に径2mmのガラス紐を巻き付け、天井部と身受け部の境としている。頂部に直径0.7cmの攝みを付ける。完形で、緑色透明を呈する。

#### 包含層他出土土器（第13図）

青磁 碗（1）体部外面に蓮弁を削り出す。高台の内側まで施釉され外底部は露胎である。灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉がかけられている。K（搅乱）03出土。

白磁 碗（2）口禿の碗IX類で、丸みをもった体部から外反する口縁部が延びる。3層（A-4）出土。

青白磁 瓶（3）吐魯瓶の肩部に把手を貼付する。残存する体部の半部には荷葉文が片切り彫りされている。



第14図 その他の出土遺物実測図(縮尺 1/3)

番号	銭種	出土遺構 地区・層位	初説年	番号	銭種	出土遺構 地区・層位	初説年	番号	銭種	出土遺構 地区・層位	初説年
1	判読不能	SE01 1		25	判読不能	SK25 1		49	判読不能	土層 6	
2	政和通寶	SE01 2	1111	26	判読不能	SK25 3		50	判読不能	土層 7	
3	祥符通寶	SE01 9	1009	27	銅津	SK27		51	治平元寶か	土層 7	1064
4	元祐通寶	SE01	1086	28	判読不能	SK33		52	崇寧重寶	土層 7	1103
5	元豐通寶	SE01	1078	29	熙寧元寶	SK38 1	1068	53	嘉祐通寶	土層 8	1056
6	判読不能	SK02 3		30	太平通寶	SK47 2	976	54	明道元寶	土層 8	1032
7	判読不能	SK02 4		31	元豐通寶	SK48	1078	55	宋元通寶	土層 9	960
8	判読不能	SK02 5		32	元豐通寶	SK60 1	1078	56	開元通寶	土層 9	621
9	政和通寶	SK02 6	1111	33	元祐通寶	SK60 3	1086	57	元符通寶	土層 10	1098
10	判読不能	SK02 8		34	祥符通寶	SK60 4	1009	58	判読不能	土層 17	
11	元祐通寶か	SK02 9	1086	35	熙寧元寶か	SK60 5	1068	59	政和通寶	土層 18	
12	判読不能	SK02 10		36	熙寧元寶	SK60 6	1068	60	判読不能	土層 19	
13	紹聖元寶	SK02 11		37	皇宋通寶	SK60 7	1038	61	判読不能	I層 1	
14	元祐通寶	SK03 上面1	1086	38	淳化元寶	SK66	990	62	判読不能	I層 1	
15	判読不能	SK03 上面3		39	皇宋通寶	SK72 1	1038	63	永樂通報	A-6 II層	1408
16	紹聖元寶	SK03 上面5	1094	40	治平元寶	SK77	1064	64	崇寧通寶	B-4 II層	1103
17	永樂通寶	SK03 1	1408	41	皇宋通寶	Pr23 1	1038	65	元寶通寶	B-5 III層	1078
18	紹聖元寶か	SK03 2	1094	42	判読不能	Pr23 2					
19	皇宋通寶	SK08	1038	43	判読不能	土層 1					
20	判読不能	SK08		44	元豐通寶	土層 2	1078				
21	景祐元寶	SK14 1	1034	45	判読不能	土層 3					
22	判読不能	SK14 2		46	政和通寶	土層 4	1111				
23	天聖元寶か	SK18 2	1023	47	祥符元寶	土層 5	1009				
24	皇宋通寶	SK20	1038	48	判読不能	土層 6					

第2表 博多通跡群第88次調査出土銅錢一覧表

把手の反対側の肩部が残存しているが、注口をつけた痕跡は見られない。内面はロクロ目が鋭く残る。灰白色の胎土に、明青灰色透明の釉が外底部を除いた部位に掛けられている。口径 3.0cm、器高 13.5cm、胸部最大径 16.8cm、底径 9.8cm を測る。2 層出土。

五彩 杯 (4) 釉上に赤褐色と黄緑色の顔料を用いて文様を描く。口縁部が欠失し、内底の釉を輪状にかき取る。1 層出土。

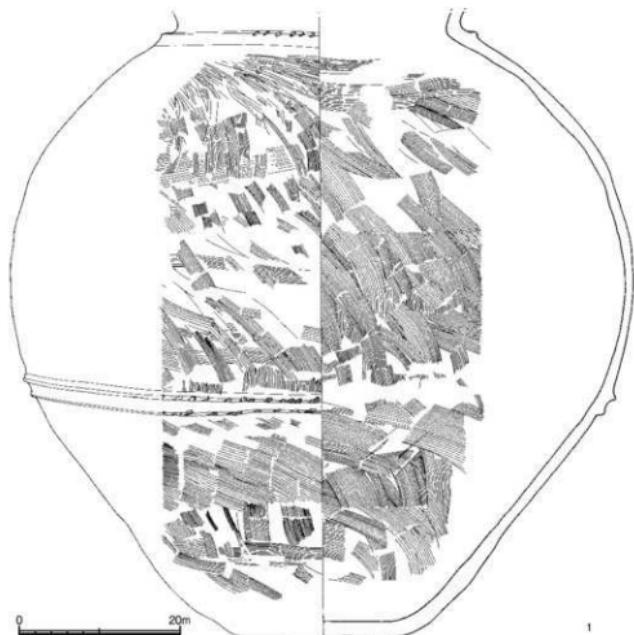
白磁 皿 (5) 高台の 4 箇所に弧状の挟り込みが入った底部辺で、外面は露胎である。1 層出土。

黒釉陶器 碗 (6) 白覆輪の粗製天目碗で、胎土は灰白色を呈し、オリーブ黒色の釉が口縁部と体部外面下半を除いた部位に掛けられている。3 層 (B-3) 出土。

青磁 水滴 (7) 宝珠形の水注をかたどり、頂部からやや下がった位置に注入孔を穿つ。胎土は灰白色で、オリーブ灰色釉を全面施釉した後、高台疊付の釉をかき取る。器高 4.1cm を測る。3 層出土。

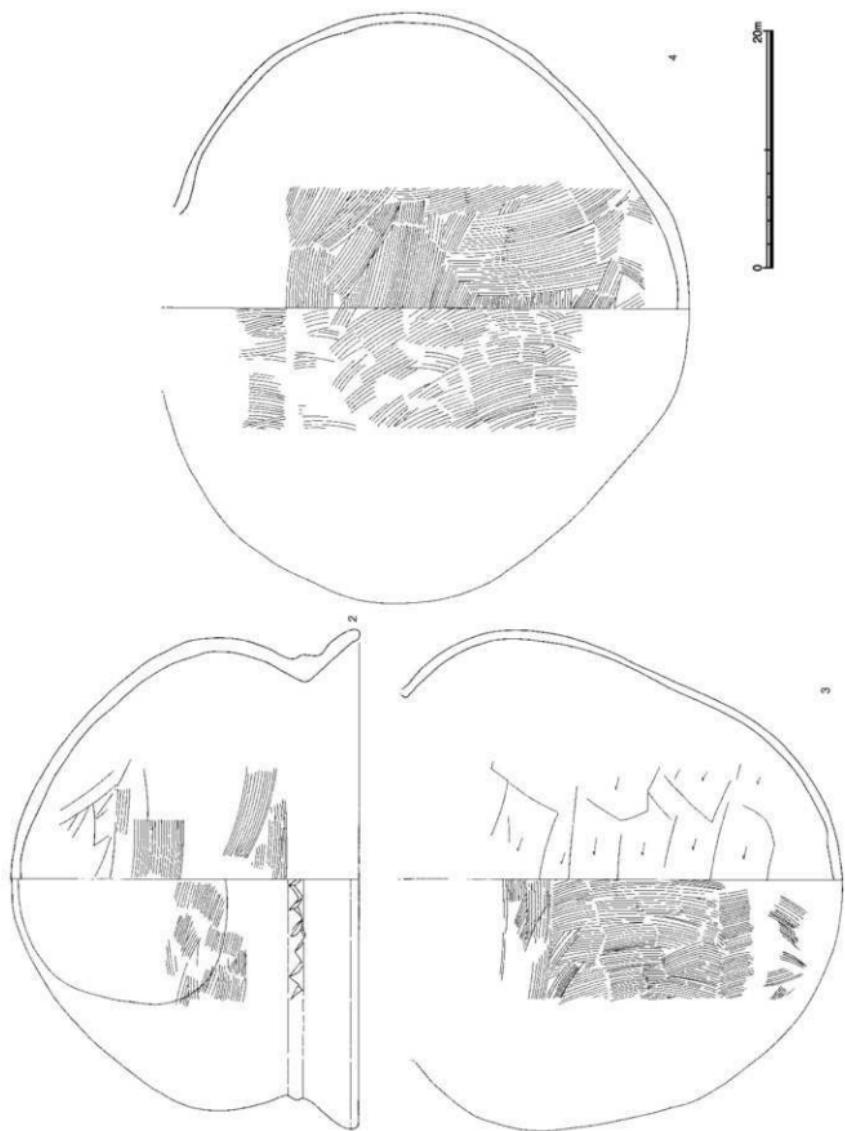
陶器 杯 (8) 濱戸産の入れ子八輪花杯で、底部は回転糸切り離しされる。胎土は浅黄色を呈し、灰白色的釉が口縁部から体部にかけての内外面に掛けられている。2 層出土。

青白磁 合子蓋 (9) 型造りによる。外面の天井部に花卉文を配する。胎土は白色で、灰白色透明の釉が外面に掛けられる。3 層出土。



第15図 出土壙棺実測図(縮尺 1/6)

第16図 出土壺棺・土器棺実測図(縮尺1/4)



**青磁 杯 (10・11)** 10は体部内面に凹蓮弁を陰刻する鉢状口縁の杯Ⅲ-3bで、口縁部は鋭く内湾して開き、端部を直上に引き出す。体部はゆるやかに内湾し立ち上がる。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉を全面に掛けた後、高台骨付の釉をかき取る。3層(A-3)出土。11は体部外面に鏡蓮弁を削り出す鉢状口縁の杯Ⅲ-4で、口縁部は水平に開き、端部を薄くおさめる。内底見込みに双魚文を配している。胎土は灰白色で、灰オリーブ色の釉を全面施釉した後、骨付の釉をかき取る。2層(B-4)出土。

#### その他の出土遺物 (第14図)

**土製加彩人物像 (1・2)** 1は型造りによる唐子の坐像で、完形である。型が擦れていたのか、彫りが浅い。振るとカラカラと音がする。胎土は精良で橙色を呈する。加彩されているが、退色が著しい。像高8.3cmを測る。2層(B-4)出土。2は唐子の頭部で、型作りによるが、目など細部はヘラを用いて彫られ、明確に表現される。3層(B-7)出土。胎土は精良で、二次的な被熱により灰黄褐色を呈する。残存する高さ6.0cmを測る。

**押圧波状重弧文軒平瓦 (3)** 胎土は精良で堅敏に焼成され、緑灰色を呈する。SK61出土。

**石製乳棒 (図版12 a-1)** 断面八角形を呈し、にぎりの部分は欠失している。2層(A-7)出土。

**石鍾 (図版12 a-2)** 分銅形を呈し、孔が上部に穿たれた一孔上溝型で、基部は球形を呈する。滑石製。2層(B-3)出土。

**長沙窯黄釉褐彩 水注 (図版12 b-1)** 断面多角形の注口がつく肩部片で、灰色の胎土に褐色～オリーブ灰色の釉がかけられている。4層(B-3)出土。

**白磁 瓶 (図版12 b-2)** 蛇の目高台を削り出す邢窯・定窯系の底部片である。胎土は灰白色、釉は白色を呈する。4層(B-6)出土。

**越州窯系青磁 瓶 (図版12 b-3)** 粗製の体部下半破片資料で、外面の下半以下は露胎である。胎土はオリーブ灰色、釉はオリーブ黄色を呈する。4層(B-3)出土。

**銅製品 菱形分銅 (図版12 c) SK25出土。菱形飾金具 (図版15 72) SK37出土。銅錢 (図版15) については第2表に示す。**

**S X96出土土器 壺 (第15図 1)** 平底の底部から胴部へほぼ直線的にのびる。底部と胴部の境は不明瞭であり。卵形の胴部につく口縁部は打ち欠かれている。断面台形の貼付け突帯を頸部に1条と胴部中位のやや下位に2条めぐらせる。突帯にヘラ状工具により施文されている。調整は外面の突帯部が横ナデ、肩部が斜め方向のヘラ磨き、胴部が斜め方向のハケ目、底部はナデ、内面は突帯の裏面が横ナデ、底部がナデ、その他の部位は斜め方向のハケ目を施す。器表に赤色顔料を塗布している。

**S X102出土土器 壺 (第16図 2・3)** 2は上壺に用いられた鉢で、底部は丸底を呈する。内湾するくの字口縁の屈曲部外面に断面半円形の突帯をめぐらせる。突帯にヘラ状工具により連続するXが施文されている。調整は内外面とも口縁部は横ナデ、体部上半は斜め方向のハケ目、下半は磨滅が著しい。体部外面下半に黒変部位がみられる。3は下壺に用いられた壺で、卵形の胴部につく口縁部は打ち欠かれている。調整は外面上半が横方向、下半は縦方向のハケ目、内面は斜め方向のヘラ削りを施す。

**S X103出土土器 壺 (第16図 4)** 凸レンズ状の底部から胴部へほぼ直線的にのびる。卵形の胴部につく口縁部は打ち欠かれている。調整は胴部内外面とも上半が斜め方向、下半は縦方向のハケ目を施す。

## IV 小結

1層上面で検出された土師器埋納土坑SK51から、まとまって出土した土師器の法量平均値は、小皿(3個体、口径7.5cm、器高1.5cm)・特小皿(2個体、口径6.3cm、器高1.8cm)・杯(1個体、口径10.5cm、器高2.4cm)、精製の小皿(10個体、口径6.0cm、器高1.4cm)・杯(7個体、口径11.4cm、器高2.7cm)を測る。精製の土師器については大内式の範疇に入るものであろう。防長地方を本拠とした守護大名大内氏と聖福寺は日明貿易を通して密接な関係にあった。15世紀以降、博多では聖福寺周辺で大内式土師器がまとめて出土している遺構が少なからず検出されており、両者の結び付きを示す物証である。SK51出土の在来系土師器はSK25出土の端反り青花皿B1群と共に共伴の小皿、SK28出土の線描き細蓮弁碗C群と共に共伴の小皿と、法量、体部外面下位に稜線がつく形状が近似し、16世紀前半とみられる。大内式についても、内面の体部と底部の境が不明瞭で、体部外面が丸みをもつ特徴から大内IV B式に相当し、在来系土師器と同じ年代とみられる(註1)。SK51が掘り込まれた1層は16世紀前半以前とみられる。

2層上面で検出された土坑SK61から出土した土師器の法量平均値は、小皿(6個体、口径8.0cm、器高1.2cm)・杯(4個体、口径11.7cm、器高2.8cm)を測り、大宰府史跡SK830段階と等しい(註2)。杯は大宰府史跡SK830の段階では口径が12cm前後と最少となり、次のSX1200新規段階では法量増に転ずる。実年代についてSK830は14世紀前後と考えられているが、SK61から共伴して出土した龍泉窯系青磁鐘状口縁蓮弁文杯III-4、須恵器こね鉢が示す年代観からも妥当といえよう。

同じ2層上面で検出されたPit56出土土師器の法量平均値は、小皿(2個体、口径8.5cm、器高1.3cm)・杯(2個体、口径13.0cm、器高2.8cm)を測り、法量がSK61より大きい。SK61が掘り込まれた2層は13世紀中頃とみられる。

3層については、掘り下げの際や下面で検出されたPit137・138出土の白磁から12世紀前半とみられる。Pit138からは完形のガラス製容器蓋が共伴しているが、同型品が博多遺跡群第79次調査2203号遺構から出土しており、成分分析が報告され、中国製とみられている。(註3)。同時代のものとして、国内では、発掘品以外にもガラス製容器が伝世している。今回報告の資料の成分分析については、別稿で改めて他の類例と合わせて報告する機会をもつこととする。

4層からは初期貿易陶磁である9世紀代とみられる長沙窯水注片や蛇の目高台白磁碗片が出土している。弘仁・貞觀文化が栄えた平安時代前期に、調査地近辺には対外交渉に関する官衙遺構の存在が想定される。

註1 大内系土師器の編年・年代観は北島大輔「大内式の設定—中世山口における遺物編年との対比—」『大内氏館跡区』山口市教育委員会 2010による。

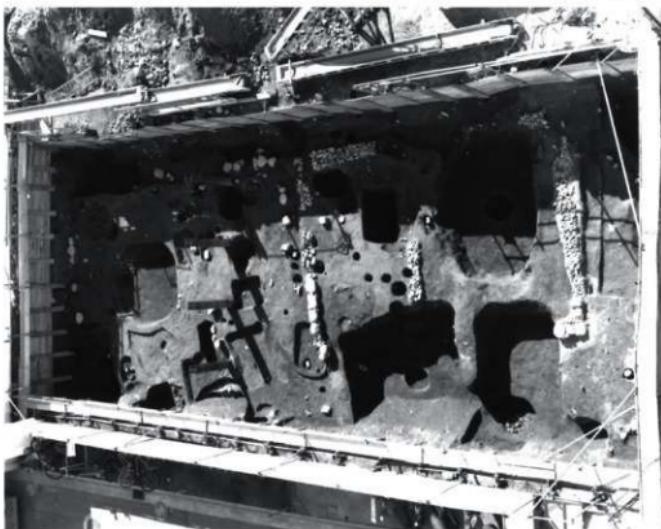
註2 在来系土師器の編年・年代観は横田賛次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978による。

註3 山崎一雄・肥塚隆保・白幡浩志「博多遺跡群第79次調査で出土した緑色ガラス容器の化学分析と鉛同位体測定」『博多50—博多遺跡群第79次調査の概要』福岡市教育委員会 1996。

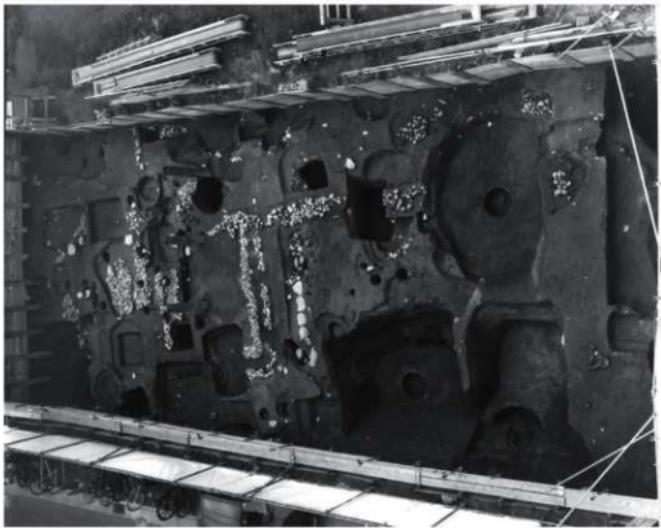
種別番号	番号	器種	出土遺構	口徑(cm)	器高(cm)	底径(cm)	種別番号	番号	器種	出土遺構	口徑(cm)	器高(cm)	底径(cm)
第10回	1	小皿	SK03	8.1	1.4	5.5	第11回	70	杯	SK55	12.4	2.5	5.6
	2			8.1	1.2	5.7		71	特小皿	SK57	7.1	1.8	4.8
	3	杯		12.1	2.9	7.2		72	小皿	SK60	7.5	0.9	5.6
	4			12.2	2.3	7.6		73			8.3	1.4	6.2
	5			12.4	2.9	7.8		74			8.5	1.5	6.3
	6			12.5	2.9	7.8		75	特小皿		7.0	1.8	5.0
	7			12.6	2.8	7.6		78	小皿	SK61	7.7	1.2	5.7
	8			12.6	2.8	7.5		79			7.8	0.9	6.0
	9			12.6	2.9	7.5		80			7.8	1.0	6.3
	11	小皿	SK07	9.2	1.7	5.1		81			7.8	1.3	5.8
	14	小皿	SK08	9.2	1.7	5.1		82			7.8	1.3	5.4
	15			8.0	1.5	6.4		83			8.0	1.2	6.1
	16			8.0	1.4	5.8		84			8.1	1.3	6.1
	17	杯		11.4	2.4	7.5		85	杯		11.3	2.7	8.0
	20	小皿	SK11	6.3	1.4	4.2		86			11.4	2.8	8.7
	21			7.5	1.9	4.2		87			11.8	2.9	8.7
	23	小皿	SK12	6.4	1.2	4.0		88			12.4	2.8	8.9
	24			6.5	1.6	3.2	第12回	93	杯	SK63	12.5	2.2	9.3
	25	杯	SK15	13.1	2.3	8.3		94	小皿	SK64	7.0	1.5	4.9
	26	小皿	SK17	8.2	1.5	5.5		95			7.8	1.3	5.7
	28	小皿	SK18	7.5	1.5	5.5		96	杯		11.7	2.2	7.2
	29	杯	SK19	11.8	2.5	9.0		97	精製杯		11.1	2.5	5.4
	30	杯	SK20	14.5	2.2	7.2		98	杯	SK66	12.4	2.5	7.6
	31	小皿	SK22	6.0	1.6	3.6		100	杯	SK74	12.0	2.6	8.2
	32			5.8	1.6	2.9		101			12.3	2.6	8.1
	33	杯		11.6	2.8	9.0		102			12.7	3.0	8.1
	34	小皿	SK25	7.1	1.8	4.2		103			12.9	2.5	8.9
	35			6.1	1.4	4.3		104			12.8	2.6	8.7
	37	小皿	SK26	6.9	1.8	4.2		105			12.9	3.0	8.6
	38	杯		13.1	2.6	9.3		106			13.0	2.4	9.0
第11回	39	小皿	SK27	5.9	1.2	4.3		107			13.0	2.8	8.7
	40	小皿	SK28	6.9	1.8	4.2		108	杯	SK75	12.1	2.7	6.4
	42	小皿	SK29	7.5	21.9	5.0		109			12.2	2.9	7.7
	44	小皿	SK41	6.2	1.7	3.2		110			12.7	2.8	7.8
	45	杯		11.1	2.1	6.3		111			12.6	2.9	8.4
	46	小皿	SK45	6.4	1.3	5.3		112			12.8	2.8	8.2
	47	小皿	SK48	7.2	1.6	5.2		113	杯	SK82	7.6	1.4	5.3
	48	小皿	SK51	7.0	1.4	5.2		114			8.1	1.5	5.0
	49			7.3	1.5	2.4		115			8.2	1.4	6.1
	50			7.9	1.7	6.1		116			8.2	1.5	6.8
	51	特小皿		6.1	1.8	4.1		117			8.4	1.0	6.9
	52			6.5	1.7	4.2		118	小皿	SK83	7.8	1.4	6.2
	53	精製小皿		6.1	1.4	3.0		119	小皿	SK88	12.3	2.8	8.4
	54			6.5	1.6	3.4		120			12.3	2.8	8.2
	55			6.6	1.4	3.0		121			12.5	3.0	7.9
	56			6.7	1.4	2.9		122			12.5	2.6	8.6
	57			6.9	1.2	2.8		123			12.7	3.0	8.5
	58			6.9	1.4	3.2		124	小皿	SK89	7.9	1.4	5.5
	59			7.0	1.4	2.8	第13回	125	小皿	Pt56	8.4	1.3	6.8
	60			7.1	1.6	2.9		126			8.5	1.3	9.3
	61			7.1	1.4	3.2		127	杯		12.8	2.8	9.4
	62	杯		10.5	2.4	7.4		128			13.2	2.8	9.3
	63	精製杯		11.2	2.8	4.2							
	64			11.1	2.7	4.5							
	65			11.2	2.7	4.0							
	66			11.3	2.5	4.9							
	67			11.4	2.6	4.1							
	68			11.6	2.7	4.7							
	69			11.9	2.9	6.4							

第3表 博多遺跡群第88次調査出土土器計測表

図版 1

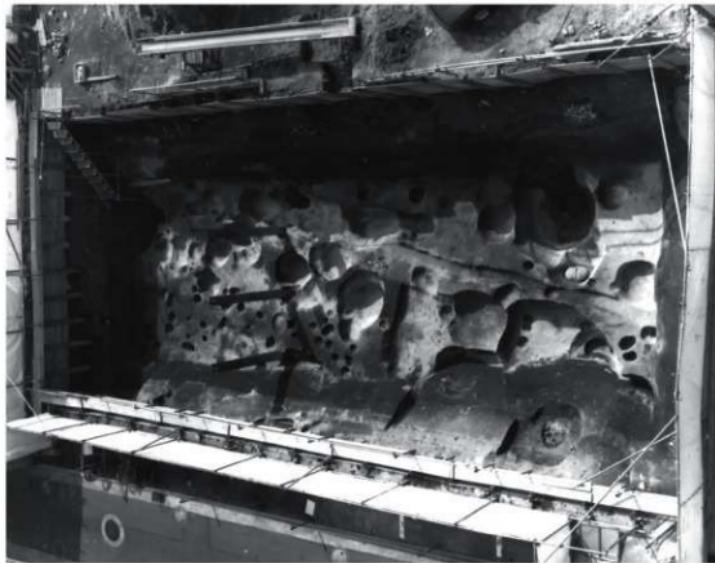


2. 2層上面全景 (北西から)



1. 1層上面全景 (北西から)

図版 2



図版 3



1. 4層下面全景（西から）



2. 石基礎（北東から）

図版 4



1. 石基礎 (北東から)



2. 石基礎 (北東から)

図版 5



2. SB47b 石基礎断面 c (北東から)



2. SB47b 石基礎断面 c (北東から)



1. SB47b 石基礎断面 b (北東から)



3. SB47b 石基礎断面 a (南東から)



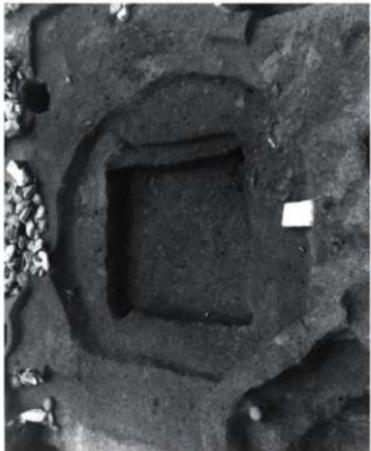
4. SB47a 石基礎断面 (北から)

5. SB47b 石基礎断面 d (南西から)

図版 6



2. S X 24 石組遺構（西から）



4. SK 25 土坑（北西から）



1. SK 82 土器溜土坑（南から）



3. Pit56 土師埋納土坑（北西から）

図版 7



1. SK 61 土器埋納土坑（西から）



2. SK 74 土器溜土坑（南東から）



3. SK 51 土器埋納土坑（北西から）



4. SX 89 土壙墓（北東から）

図版 8



1. S X 102 土器棺墓（北西から）



2. S X 102 土器棺墓（南西から）

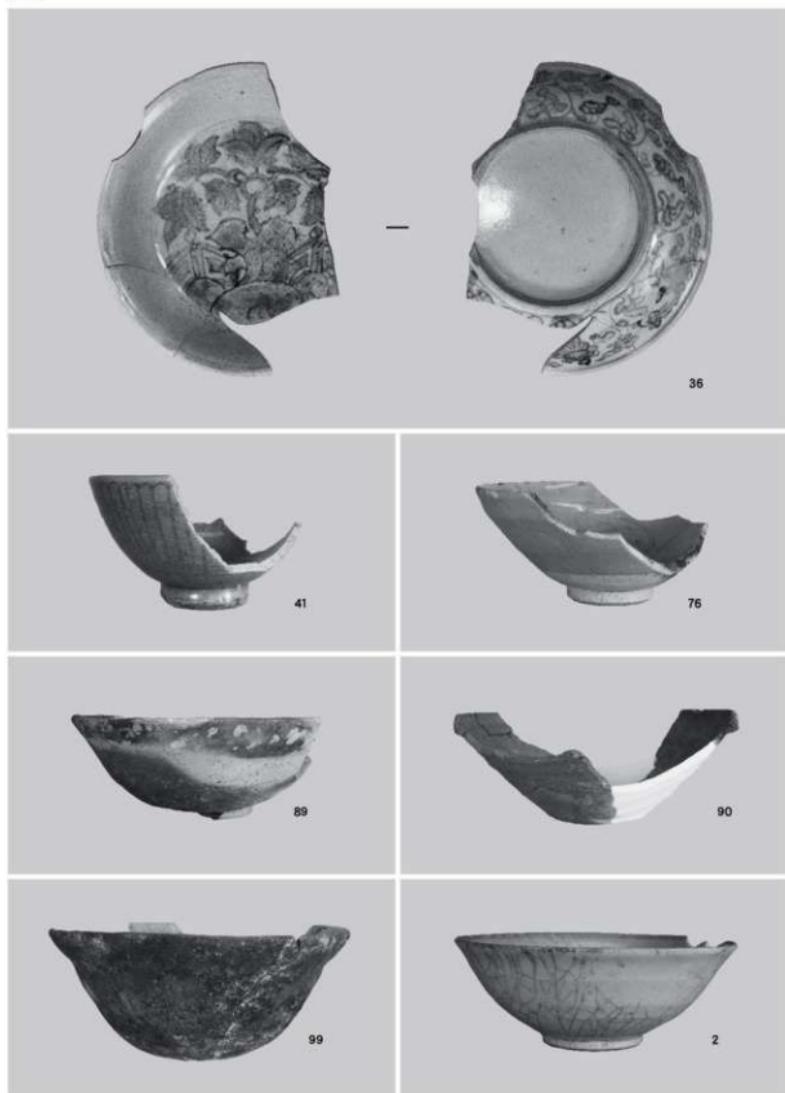


1. S X 103 墓棺（南西から）



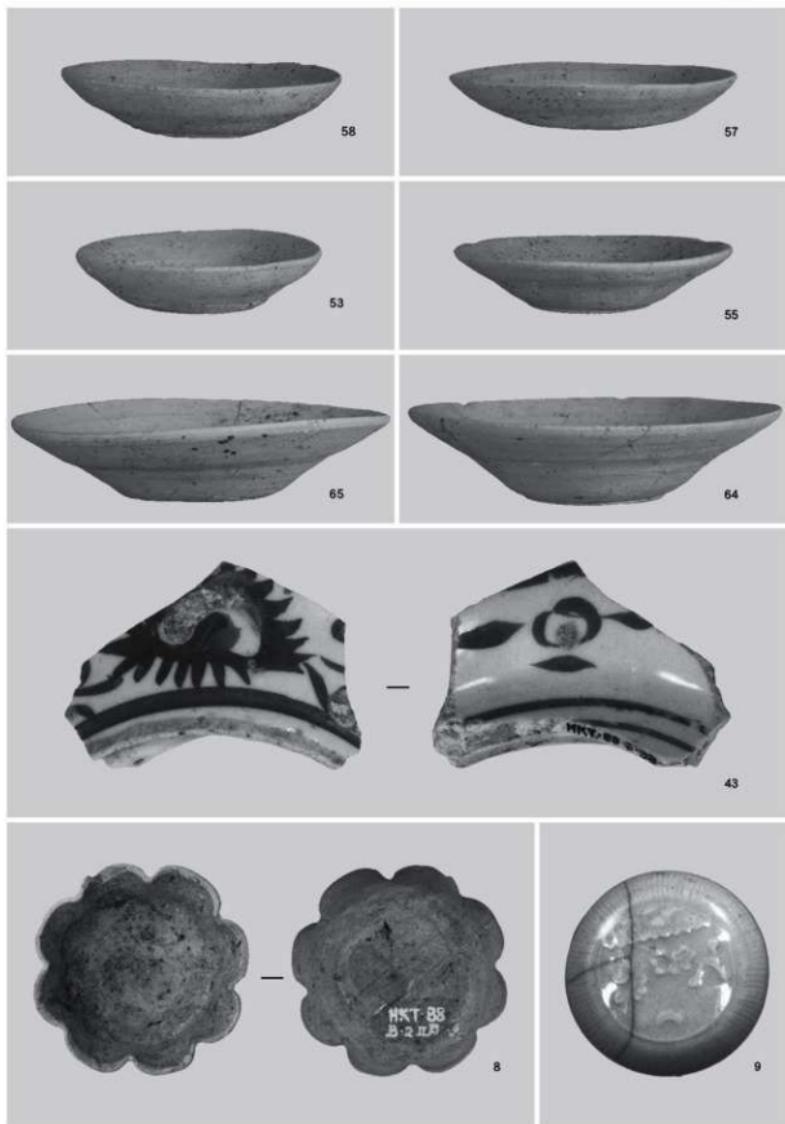
2. S X 96 墓棺（南西から）

图版10



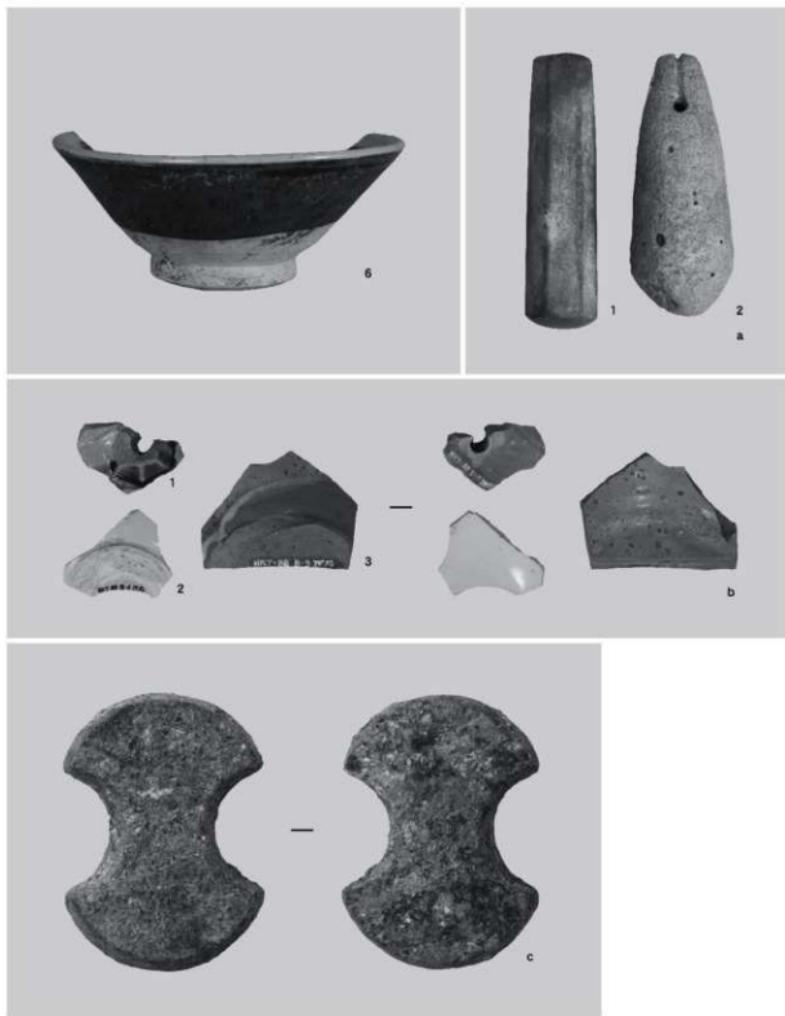
出土遗物 (1)

図版 11



出土遺物 (2)

图版12



出土遗物 (3)

図版13



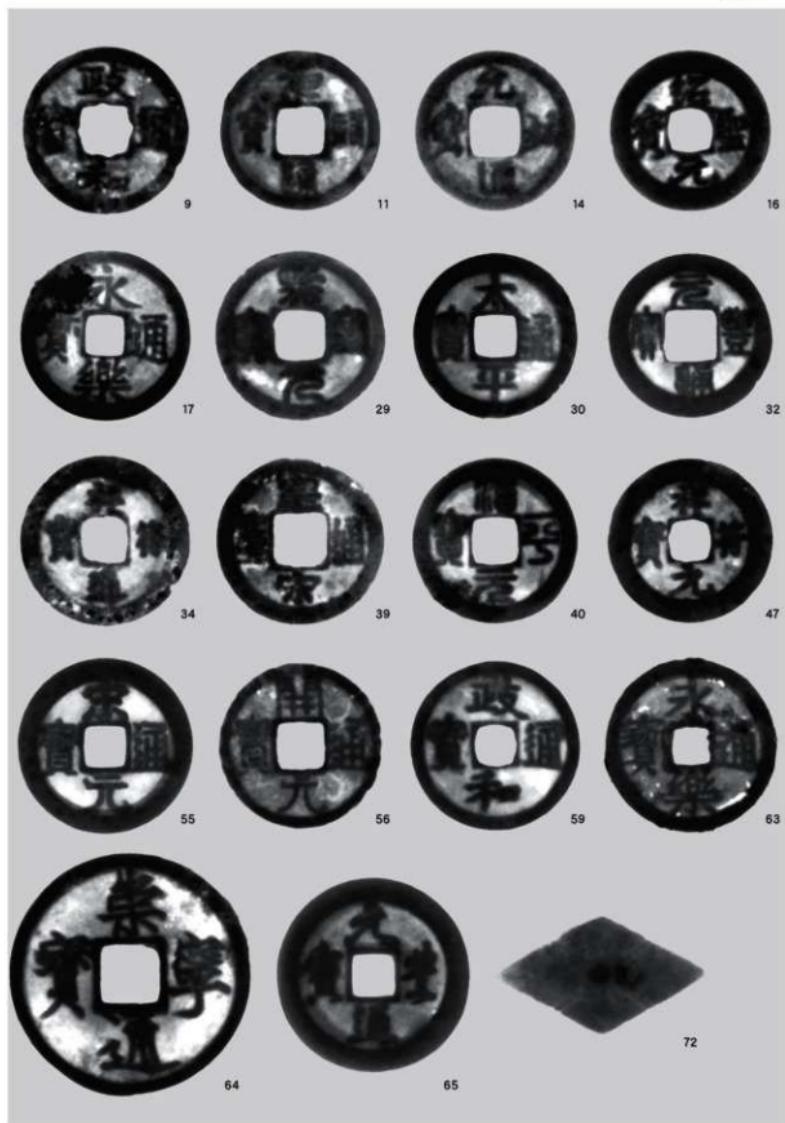
出土遺物 (4)

图版 14



出土遗物 (5)

図版15



出土遺物 (6)

## —報告書抄録—



---

# 博多 153

－ 博多遺跡群第 88 次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1288 集

2016 年 3 月 25 日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神 1 丁目 8 番 1 号

印刷 有限会社 西菱

福岡市早良区次郎丸 1-7-1

---

